Ⅲ 来訪者管理戦略

1 要旨

- ➤ 富士山世界文化遺産協議会は、来訪者管理の目標として定めた「望ましい富士登山の 在り方」を実現するために、2015 年~2017 年の3年間に実施した調査研究結果に基 づく指標及び水準を設定するとともに、水準の達成を目指した対策を実施している。
 - ・登山者動態調査・意識調査等の実施及び結果の分析(2015年~2017年)
 - ・2019 年を目標とした 11 項目の指標及び水準の設定、水準達成に必要な対策の実施
 - ・目標最終年(2019年)に対策及び指標等の評価・見直しを予定(以降概ね5年毎に 実施予定)

【参考資料3 (P27),参考資料4 (P32)】

- ▶ 山梨県・静岡県は、上方の登山道において、特定の日・時間帯・箇所に集中する登山者数の平準化や登山者の安全確保のための情報提供等の対策を中心に実施している。また、山麓地域においては、下方斜面の巡礼路の特定や情報提供戦略との連携の下、来訪者の山麓の構成資産等への誘導又は周遊を推進し、構成資産相互のつながりや顕著な普遍的価値に関する来訪者の認知・理解を促進している。
 - ・混雑予想カレンダー等の作成、マイカー規制の継続、安全誘導員等の配置
 - ・モデルコース・ガイドツアーの設定、周遊ガイドマップ等の作成・配付 等

【参考資料2 (P21) [再掲]】

2 戦略に記載した取組の方向性

(1)望ましい富士登山の在り方に基づく収容力の研究・指標の設定

将来にわたる富士山の保存と活用の調和を図る観点から、専門家の助言を得つつ、「上方の登山道の収容力」を中心とした調査研究を実施する。さらに、地元関係者等との協議の下、①登山の文化的伝統の継承、②展望景観の維持、③登山の安全性と快適性の確保(登山者数を含む)の視点に基づく多角的な視点からの複数の指標と指標ごとに望ましい水準を設定する。

(2) 施策の実施

富士山の保全に取り組む企業・団体・地元関係者等の連携の下に「望ましい富士登山の在り方」を実現するため、指標ごとに定めた望ましい水準の達成を目的として、 上方の登山道に着目しつつ、山麓地域を包含した施策を実施する。

(3) 施策・指標の見直し

実施した施策、設定した指標と指標ごとの望ましい水準について、評価・見直しを 定期的に実施する。

3 実施状況

(1) 収容力の研究・指標の設定

戦略に記載した対策の概要	進捗状況				
2015 年から 2017 年の 3年間の調査 研究結果を踏まえ、2018 年7月まで に、登山道ごとの1日当たりの登山者 数を含め、複数の指標と指標ごとの望	3年間の収容力に関する調査研究を実施するとともに、望ましい富士登山の在り方の3つの視点ごとに、合計 11 項目の指標及びその目標水準を設定した。				
ましい水準を設定する。	さらに、今後、必要な施策を推進するととも に、継続的にモニタリングを実施し、適切な来 訪者管理を行う。				

(2) 施策の実施

ア 上方の登山道

① 特定の日・時間帯に山頂付近に集中する登山者数の平準化の推進

戦略に記載した対策の概要	進捗状況				
山麓の駐車場と五合目との間のシャ	山梨県・静岡県は、マイカー規制期間中に運				
トルバスの最終発車時間を見直すこ	行するシャトルバスの山麓からの最終発車時				
と。	間を段階的に見直し、2016年に全日20時まで				
	に前倒しした。				
山麓からの登山を推奨すること。	富士吉田市は、「山麓からの登山」を推奨するため、情報提供を強化している。				
下方斜面における巡礼路に関する調査・研究の成果に基づき、山麓の構成資産への訪問を誘導すること。	山梨県・静岡県は、下方斜面における巡礼路の特定に関する調査・研究成果に着目し、「登山道・巡礼路の位置・経路」を踏まえ、山麓の構成資産を巡るモデルコースやガイドツアーの設定を行い、富士山麓への周遊を推進している。(再掲)				

② 普及啓発の推進

戦略に記載した対策の概要	進捗状況
安全・安心な登山を行うための情報提供、マナー啓発等を行うこと。	山梨県・静岡県は、宿泊を伴わない夜通し登山の自粛要請やマナー啓発、安全・安心な登山を行うための情報提供を継続して行っており、2017年からは、登山日毎の混雑予想を掲載したカレンダーを作成し広報することで、登山者数の平準化に取り組んでいる。
「富士登山の観光・安全総合情報システム」を構築すること。	山梨県・静岡県は、登山計画の提出を促すため、 日本山岳ガイド協会が運営するアプリ「コンパス」の利用啓発に努めている。 静岡県は、「富士登山の観光・安全総合情報システム」として、観光アプリ「富士山ぐるぐる旅行」を構築し、「コンパス」との連携により、登山届の提出に加え、富士山周辺の観光情報や防災情報の提供に努めている。

③ 自家用車の通行規制

戦略に記載した対策の概要	進捗状況				
自家用車の通行規制を行うこと。	静岡県は、ふじあざみライン(須走口)において、2016年からマイカー規制期間を47日から63日間に拡大し、富士山スカイライン(富士宮口)と期間を統一し、開山期間全日実施している。山梨県は、富士スバルライン(吉田口)において2017年からマイカー規制期間を53日から63日間に拡大した。				

④利用者負担の実施

戦略に記載した対策の概要	進捗状況				
登山者からの任意の協力を求める	山梨県・静岡県は、「富士山保全協力金」への				
「富士山保全協力金」を着実に実施	理解を促進するため、インターネットやシャトル				
し、環境保全、安全対策等を図る事	バス内での事前案内を強化するとともに、現地で				
業を推進すること。	の受付体制の見直しを行っている。				

⑤トイレの適切な維持管理

戦略に記載した対策の概要	進捗状況				
上方の登山道のトイレの適切な維	環境省及び山梨県・静岡県は、トイレの処理能				
持管理を推進すること。	力に関する調査を実施しており、静岡県では、保				
	全協力金を活用した補助制度により老朽化した				
	設備の改修を行うなど、トイレの適切な維持管理				
	を進めている。				

イ 山麓地域

①山麓の構成資産への訪問の誘導

戦略に記載した対策の概要	進捗状況				
下方斜面の巡礼路の特定により、	山梨県・静岡県は、下方斜面における巡礼路の				
来訪者を山麓の構成資産へ誘導する	特定に関する調査・研究成果に着目し、「登山道・				
こと。	巡礼路の位置・経路」を踏まえ、山麓の構成資産				
	を巡るモデルコースやガイドツアーの設定を行				
	い、富士山麓への周遊を推進している。(再掲)				

②山麓地域への周遊の推進

戦略に記載した対策の概要	進捗状況
富士山麓地域の魅力を味わい体験 してもらうため、来訪者の富士山麓 への周遊を推進すること。	山梨県・静岡県は、下方斜面における巡礼路の特定に関する調査・研究成果に着目し、「登山道・巡礼路の位置・経路」を踏まえ、山麓の構成資産を巡るモデルコースやガイドツアーの設定を行い、富士山麓への周遊を推進している。(再掲)
構成資産間のつながりや顕著な普	山梨県・静岡県は、ガイドブックやホームページなどの広報媒体を通じた情報発信及びガイド等による案内を継続して実施している。

<参考資料3>「望ましい富士登山の在り方」の実現に向けた来訪者管理計画

来訪者管理戦略(2016年1月 ユネスコ世界遺産センターへ提出)

- ▶ 来訪者管理の目標として 「望ましい富士登山の在り方」(①登山の文化的伝統の継承、②展望景観の維持、③登山の安全性・快適性の確保)を定義。
- ▶ 「望ましい富士登山の在り方」を実現するために、<u>指標を設け* (PLAN)、対策を実施し(D</u>
 O)、2015 年を起点として、概ね5年ごとに指標・対策の評価(CHECK)・見直し(ACTION)を実施。
 - * 来訪者管理戦略に示した**PLANに該当するものとして、**2015 年~2017 年の3年間の調査研究結果に基づき、指標・水準・対策等を示した来訪者管理計画を策定。

来訪者管理計画

1 調査研究結果の概要

登山者の意識	登山者の動態				
• 「人の多さが許容できない」、「危険を感じ	• 登山期間中、限られた日 [週末・お盆]・時間				
た」割合は登山者数に比例して増加する傾	帯[御来光前後]・箇所[吉田・須走口合流地				
向。	点(本八合目)より上方及び富士宮口山頂付				
• 「総合満足度」、「神聖さを感じた」等は登	近] において、登山者の集中に起因する著し				
山者数に関係なく一定割合存在。	い混雑が発生。				

2 計画期間

「望ましい富士登山の在り方」の実現を長期目標としつつ、来訪者管理戦略を策定した 2015 年を起点とした5年間 (2019 年まで)を計画期間 とする。

特に、登山の安全性・快適性を確保する観点から、極めて限定的に発生している著しい混雑の 解消を図ることを当面の重点目標とする。

3 指標・水準の設定

(1) 選定基準

指標	「望ましい富士登山の在り方」の実現につながり、変化を容易に確認できること。 など
水準	定量的な指標は、現状値から10%程度の改善を目指す。 など

(2)「望ましい富士登山の在り方」の実現に向けた指標・水準

望ましい富士登山の 在り方		+E-+==	5%. I		現状		水準 (2019 年の	モニタリング
視点	区分	指標	登山口	2015	2016	2017	目標値)	方法
十七世	頂上付近で御 来光を拝む場 合には、途中 の山小屋で宿 泊・休憩してい ること	伝統的な登拝の登 山形態と同様に、山 小屋で休息してか ら山頂で御来光を 拝む登山者の割合	全体	69.0%	68.2%	77.7%	80%以上	◎登山者アンケート[分母は山頂で御来光を拝んだ(見た)登山者数]
七世紀以来の登拝に起源する登山の文化的伝統の継承	特定された山 麓の巡礼路・登 山道からの登 山が行われて いること	古くからの巡礼路としてルートが特定されている吉田口登山道における山麓からの登山者の割合	吉田	11.9%	13.7%	12.4%	15%以上	◎吉田口五合目 登山者数カウント [分母は吉田口 八合目登山者数 カウント]
◎登山の文化的伝統の継	山麓の神社・霊 地等と登山道と のつながりが 認知・理解され ていること	山麓の神社や湖な どを巡ったのちに 富士登山をする文 化的伝統を知って いる登山者の割合	全体	32.9%	39.0%	47.0%	50%以上	○登山者アンケート[以前から知っていた/今回の登山・訪問で知った人の割合]
策		富士山に「神聖さ」 を感じた登山者の 割合	全体	83.0%	88.2%	85.9%	90%以上	○登山者アンケート「感じた/少し感じた/の割合]
登山道及び山頂付近の良好な展望景観の維持	山小屋・防災関連の施設等の登山者のための施設が自然と調和していること	自然と調和しない人 工構造物による登 山道沿いの景観阻 害	全体	なし	なし	なし	非調和的要素が予見又は発見されない	,
好な展望景観の維持	浸食・植生等の 変化による展 望景観への影 響が抑制され ていること	五合目以上におけ る登山道の浸食や 植生等の変化によ る展望景観の変化	全体	なし	なし	なし	負の影響が 予見又は確 認されない	

望ましい富士登山の 在り方		+七+亜	≫. 1.□	現状			水準 (2019 年の	モニタリング
視点	区分	指標	登山口	2015	2016	2017	目標値)	方法
	登山装備·登山	登山道や山頂付近 でゴミをよく見かけ た登山者の割合	全体		26.8%	19.6%	15%以下	◎登山者アンケ ート
	マナー等が理解されていること	人的要因による文 化財き損届の件数	全体	1件	0件	2件	0件	◎特別名勝・史跡 富士山に係る文 化財き損届(五合 目以上)
登山の安全	過剰な登山者数 による混雑・危 険・不満を感じ ない登山ができ ること	吉田口から登山し、誤って須走口に下山した人の割合(須走口五合目ガイド対応分)	吉田須走	0.72% (981 人)	0.48% (731 人)	0.54% (928 人)	0.4%以下	◎須走口五合目 ガイド対応者数 [分母は吉田口八 合目登山者数カ ウント]
登山の安全性・快適性の確保		山小屋やトイレなど の登山者への支援 施設に不満を感じ た登山者の割合	全体	_	19.1%	19.3%	15%以下	◎登山者アンケートート[とても不満/やや不満の割合](現状値はトイレへの不満の最大値)
		夏山期間を通じて 著しい混雑が発生	吉田	4 日	4 日	5 日	3 目以下	◎八合目登山者
		する登山者数/日* を超えた日数	富士宮	3 日	2 日	4 日	2日以下	数カウント ◎登山者アンケ ート
		* 吉田口:4,000 人/日	御殿場					[混雑の許容度、 危険を感じた割 合 等]
		富士宮口:2,000 人/日	須走	_	_	_	_	11 77

※登山者数に関する指標・水準の設定については、参考資料4に詳述する。

4 対策の実施

(1) 主に「登山の文化的伝統の継承」の実現に資する対策の例



(2) 主に「展望景観の維持」の実現に資する対策の例



(3) 主に「登山の安全性・快適性の確保」の実現に資する対策の例



5 指標・対策の評価・見直しの実施

▶ モニタリングは、機器や人件費に過度な経費を必要とせず、継続的に実施可能な方法を採用。

モニタリング方法	周期
アンケート調査、登山者数調査、現地職員による記録、法的手続きの届出件数、 景観変化の観察	毎年
登山者動態調査	概ね5年

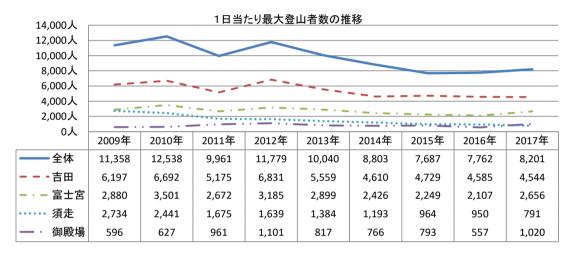
- ▶ 計画最終年(次回は2019年)に指標・水準の達成状況を評価するとともに、次期計画期間の指標・水準等を決定。
- ▶ 特に、著しい混雑が緩和された場合には、登山者数に着目し続けるのではなく、危険・不満を感じない等の登山者意識に着目した指標等を設定するなど、「登山の利用体験の質の向上」を図る。
- ▶ 富士山世界文化遺産協議会が実施状況を把握し、評価・見直しを実施。

<参考資料4>登山者数に関する指標・水準の設定

来訪者管理戦略では、複数ある指標の1つとして、「登山道ごとの1日当たりの登山者数」を 設定することとしていることから、近年の登山者数の傾向や登山道における混雑の発生状況等を 多角的に分析するとともに、地元関係者や登山者の理解・協力が得られるよう検討を進め、登山 者数に関する指標・水準の設定を行った。

1 登山者数の推移・傾向

- 2017年の全体登山者数は、ピーク時(2010年)に比べ約2割減少(320,975人→248,411人)
- 2017年の1日当たりの最大登山者数は、ピーク時(2010年)に比べ約3割減少。(12,538人→8,201人)



2 登山道における混雑の発生状況

- GPSロガーを用いて位置情報や速度等を把握する動態調査を実施した結果、登山道における混雑の発生は、**極めて限定的** なものであることが判明した。
- さらに調査結果を元に、登山道ごとに特定区間の登山者密度、所要時間等を推計した結果、 登山者数の増加に比例して登山者密度の高まりや所要時間の増加が見られることなどを確 認した。

3 指標の設定

- 来訪者管理戦略では、「登山道ごとの1日当たりの登山者数」を含めた複数の指標を設定することとしたが、登山の安全性や快適性が損なわれるような著しい混雑は、恒常的に発生しているわけではない。ため、単に「1日当たり登山者数」と表記しても、限定的に発生する混雑の緩和に直結しない上、登山者数を超えた段階で入山規制が始まるものと誤解される恐れがある。
- このため、「特定の日・時間帯・箇所における著しい混雑の緩和」を目指す 財確に伝わるよう、次のとおり登山者数に関する指標を定める。

【指標】 夏山期間を通じて著しい混雑が発生する登山者数/日を超えた日数

4 目標水準の設定

特定の日・時間帯・箇所の混雑の緩和を目指す観点から、指標に定めた「夏山期間を通じて著 しい混雑が発生する1日あたりの登山者数を超過した日数」を減らすことを目標とする。

(1) 著しい混雑が発生する1日当たりの登山者数

ア 収容力(登山者数)の概念

- ➤ ユネスコ世界遺産センター発行(2002年)の「世界遺産における来訪者管理~世界遺産管理マニュアル」では、収容力を「物理的収容力」、「社会的収容力」及び「生態的収容力」の3つの概念に分類している。
- ▶ 富士山の上方の登山道において、現状では生態的収容力で規定することは困難であるため、 主に物理的収容力及び社会的収容力の観点から著しい混雑が発生する1日当たりの登山 者数を導出する。

収容力の概念

物理的収容力

利用可能なスペースとの関係で捉えられる。「設備収容力」とも呼ばれ、宿泊客に提供可能なベッド数、駐車場が満杯となる車の数、キャンプ地におけるキャンプ客数、劇場での座席数等で規定される。

富士山への適用可能性

登山者意識調査・動態調査等の研究結果から、登山 者密度は、登山者数の増加に伴って高まり、かつ混雑 への許容度が低下する関係性が見られることから、社 会的収容力の指標である登山者意識と組み合わせる ことで、収容力導出の根拠となり得る。

一方、広大な登山道や山頂部で物理的に収容できる 人数は、社会的・生態的収容力を上回る。また、施設・ 設備の収容・処理能力から収容できる人数は、整備状 況に左右されるため、これらを富士山の収容力の根拠 とすることは、妥当でない。

社会的収容力

心理的、社会文化的なものであり、ある利用スペースにおいて、何人以上になるとレクリエーション体験の質や利用者の満足度が落ちるといった限界値のこと。

登山者意識調査・動態調査等の研究結果から、登山 者数と登山道の渋滞、登山者の満足度・混雑への許容 度等に相関関係が見られることから、特に登山の安全 性・快適性を確保する観点から収容力導出の根拠とす る。

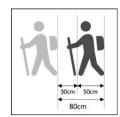
生態的収容力

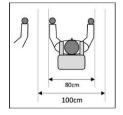
生態系が持続可能な機能を維持しつつ、どの程度の人為的干渉に耐えることができるかということ。

五合目以上の登山道は、厳しい自然環境(風雨・融雪)による浸食が発生する箇所が見られる一方、堅牢な溶岩で形成されている箇所では登山行為による影響を受けにくく、また、標高が高くなるにつれて、動植物がほとんど見られないなど、土壌の浸食及び生物個体数等から収容力を導出することは困難である。

イ 1人当たり必要面積(登山者密度)

- ▶現地調査等の結果から、富士登山において、前後左右の人と接触しないためには、次の距離が必要と推計。
 - ・前後の間隔80cm (必要な前者との空間 [30cm] +荷物と人の厚み [50cm])
 - ・左右の間隔 100cm (人の幅 [80cm] +ストック等の振れ幅 [左右各 10cm])
- ➤ これより、1人当たり必要面積は最低0.8 m²/人。
- ▶ これを密度に換算すると、 1.25 人/m^2 となり、密度がこれ以上高まると混雑すると想定する。



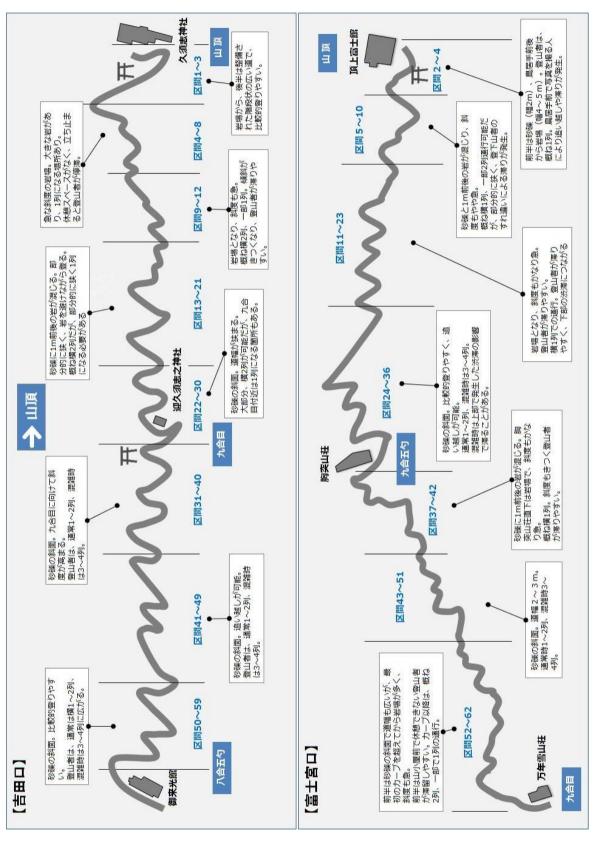


ウ 登山者数別の登山者密度等の変化

- ▶ 吉田口及び富士宮口における、御来光時間前後の頂上付近の登山者密度や登山者意識を、登山者数別に推計した。
- ➤ その際、登山者の集中状況を登山者密度(登山者の間隔)により区分した上で、それぞれ次表に示す色で視覚的に表現した。

				1
	・前の登山者を気に	・前後に登山者はいる	・時々立ち止まる必要	・止まりながら徐々に
	せずに自分のペー	が、連続歩行が可能。	がある。	進む。
	スで歩行が可能。	手を広げるとストッ	・前の登山者に注意し	・ストックやザックが
	・手を広げても周囲	ク等が周囲の登山者	ていないと、急に立	ぶつかり合う。
	の登山者とぶつか	にぶつかる危険があ	ち止まった際にぶつ	・前方の登山者が転倒
	ることはない。	る。	かる危険がある。	した場合、巻き込まれ
				る危険性がある。
登山者の				
様子				
基準(登山者の間隔)	~0.67 人/㎡ (間隔 100cn 以上)	0.67~1.00 人/㎡ (間隔 100-50cm)	1.00~1.25 人/㎡ (間隔 50-30cm)	1.25 人/ ㎡~ (間隔 30cm 未満)
推計に示す 密度の色	白	黄	橙	赤

登山者の集中度合いと登山者密度



調査区間の特徴(吉田口:八合五勺~山頂、富士宮口:九合目~山頂)

①吉田口

ішн				
	山者数	3,500 人		
(前日	登山者数)	3,000 X		
登山者密度		出頂直下	0.00 0.00	
			58 分	
御来光館~山頂 日中出発 直下の所要時間 午前2時出発			97分	
		登山道の人の多さが許容できない	9.4%	
登山者意識	(登山道)	登山道の人の多さがあまり許容できない	24.8%	
	混雑許容度	山頂の人の多さが許容できない	9. 6%	
	(山頂)	山頂の人の多さがあまり許容できない	22. 0%	
	危険の認識	無理な追い越しによる危険があった	22.4%	
登山者の様子 2016/8/15 4:32 山頂直下 前日登山者数 3,659 人			: 3,659 人	
備考		・御来光直前に、登山道上に大きな岩があ 度赤が発生するが、30分以上継続するこ		

4.000 人 4.500 人 0.28 0.27 0.52 0.97 1.11 0.20 0.39 0.15 0.41 0.54 0.11 0.18 0.13 0.28 0.30 0.33 0.30 0.60 0.24 0.45 0.12 0.26 0.74 0.34 岩がある 7 岩がある 0.81 0.60 0.42 0.62 0.25 0.04 0.07 0.04 0.06 0.09 0.05 0.20 0.18 0.03 0.03 0.30 0.68 0.35 0.09 0.06 0.08 0.03 0.07 0.30 0.56 0.34 0.20 0.09 0.03 0.30 0.56 0.34 0.20 0.09 0.13 0.73 0.74 0.50 0.21 0.18 0.07 0.57 0.52 0.38 0.18 0.13 0.04 0.82 0.69 0.45 0.17 0.07 0.04 0.66 0.32 0.20 0.10 0.05 0.03 0.56 0.37 0.41 0.25 0.09 0.03 0.04 0.23 0.11 0.16 0.04 0.07 日中出発 日中出発 60分 61分 午前2時出発 午前2時出発 105分 112分 登山道の人の多さが許容できない 登山道の人の多さが許容できない 12.8% 11. 1% 登山道の人の多さがあまり許容できない 登山道の人の多さがあまり許容できない 32, 2% 28.5% 山頂の人の多さが許容できない 山頂の人の多さが許容できない 12.7% 11.2% 山頂の人の多さがあまり許容できない 25.2% 山頂の人の多さがあまり許容できない 28.4% 無理な追い越しによる危険があった 無理な追い越しによる危険があった 26.5% 24.5%



2017/8/6 5:21 九合目付近 前日登山者数 4,066 人

- ・登山道上に大きな岩がある区間7で密度赤の状況が1時間以上継続する。
- ・岩場が始まる区間 17~15 では連続して密度赤の発生が見られる。
- ・九合目より下に密度黄の区間が広がる。



2017/8/13 3:22 九合目付近 前日登山者数 4,544 人

- ・密度赤の状況が同時に複数個所で発生し、1時間以上継続する箇所や同時に2区間に亘って連続する箇所が散見される。
- ・九合目以下でも密度赤が発生し、4000 人時と 比較して密度橙の区間が増える。

②富士宮口

2) 届工呂口					
	山者数	1,500 人			
(前日:	登山者数) 	7,227.			
登山者密度		山頂直下 汗 10 948 2:00 2:30 3:00 3:30 4:00 4:30 5:00 5:30 6:00 6:30 7:30			
		(ソナコ山北) 62 万年別山田前 0.75 0.68 0.28 0.09 0.04 0.06 0.05 0.12 0.30 0.21 0.49 0.38			
	在~山頂直下 一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	日中出発 33 分 午前 2 時出発 52 分			
71.1.41	混雑許容度	登山道の人の多さが許容できない 4.4%			
	(登山道)	登山道の人の多さがあまり許容できない 13.0%			
登山者 意識	混雑許容度	山頂の人の多さが許容できない 4.6%			
72,450	(山頂)	山頂の人の多さがあまり許容できない 10.9%			
	危険の認識	無理な追い越しによる危険があった 17.3%			
登山	登山者の様子 2015/8/12 4:47 山頂直下 前日登山者数 1,494 人				
・御来光後に山頂直下で密度赤の状況が 1 時間程度発生 備 考 が、他の区間で密度赤が発生することはない。					

2,000 人		2,500 人		
\$ 0.03	1,11 1,12 1,13 1,15	S	Columb C	
日中出発	32分	日中出発	31分	
午前2時出発	57分	午前2時出発	62分	
登山道の人の多さが許容できない	5. 7%	登山道の人の多さが許容できない	7.0%	
登山道の人の多さがあまり許容できない	17. 3%	登山道の人の多さがあまり許容できない	21.6%	
山頂の人の多さが許容できない	5. 9%	山頂の人の多さが許容できない	7. 3%	
山頂の人の多さがあまり許容できない	13. 9%	山頂の人の多さがあまり許容できない	16.8%	
無理な追い越しによる危険があった	21. 5%	無理な追い越しによる危険があった	25. 7%	



2017/8/13 2:58 九合五勺付近 前日登山者数 1,919 人

・御来光後の山頂直下の混雑(赤密度)の継続時間 が長くなる。また、下の箇所でも登山時および下 山時に赤密度が発生し、区間 44 周辺では同時間 帯で2区間に渡っている。



2017/8/6 6:06 山頂直下 前日登山者数 2,290 人

・御来光後に山頂直下で長時間に亘り密度赤の状況が発生し、7時30分頃まで解消しない。また、複数の区間において密度赤の状況が見られるとともに、1時間以上継続する箇所や2区間に亘って連続する箇所も見られる。

エ 富士山における「著しい混雑」の定義及び発生の目安

●「著しい混雑」の定義

▶ 現地調査の結果及び前項の推計結果から、富士山における「著しい混雑」を次のとおり定義する。

山頂から九合目までの区間において、**登山者密度が 1.25 人/㎡以上になる状態が同時に 複数箇所で発生**し、かつ、**一つの区間で 1 時間以上継続**する又は **2 区間以上連続して発生** する状況。

●「著しい混雑」の発生目安

- ➤ 物理的収容力及び社会的収容力(登山者密度の登山者意識の関係等)に係る調査結果及び「著しい混雑」の定義を踏まえ、関係者間の合意を経て、著しい混雑が発生する1日当たりの登山者数の目安は、吉田口を4,000人、富士宮口を2,000人と設定する。
- ▶ 御殿場口及び須走口(吉田口と合流する本八合目より下)は、現状では目立った混雑が発生しないため、指標・水準は設定しない。

(2) 2019年の目標水準

▶ 2019 年の目標値は、前項で設定した登山者数を超えた日数を減らしていく観点から現状 (2015~2017 年の超過日数の平均値)を踏まえ、

『吉田口 : 3日以下』 『富士宮口: 2日以下』

と設定する。

■富士山の上方の登山道の収容力に係る調査・研究結果及びそれらに基づく来訪者管理計画の 詳細については、下記 URL 参照のこと

http://www.fujisan-3776.jp/preservation/visitor-management/management-plan/index.html